

【行動とその意味するもの～食べる①～】

では今回は、食べるということに注目して、食堂場面の観察力について考えていきましょう。

Aさんは、比較的自立が進んでいる人です。身の回りのことはほとんどでき、話すこともできます。私たちには、このような方を相手にした時にどうしても陥りやすい欠点があります。それはその人の言動の全てを丸ごと正しいと信じてしまう傾向があることです。流暢にしゃべることができるばかりに、その言葉を信じてしまうのです。

Aさんは「魚は嫌い」だと支援者に伝えることができ、常に魚を残していました。しかし、長いつきあいの中でAさんの言動は、常に本心を伝えているのではないと気がつき始めた職員が、ある時魚の骨を取って見たのです。すると彼はその魚を美味しくそうに食べたのです。つまり彼は魚が嫌いだったのではなく、骨のついた魚が嫌いだったということになります。長い習慣の中で「魚の骨を取って」というような甘えを職員に見せることは彼にはしてはいけないことになっていたのでしょうか。「できることは自分でしなさい」の強要がAさんを長い間苦しめていたのです。それからのAさん、「骨、取ってえ！」とニコニコして叫んでいます。

一方、全くしゃべることができないBさん、長い間、栄養補助食品で命をつないでいます。それは、副食のほとんどを残飯入れに捨ててしまっていて、ろくろく食事が取れないからでした。

残念ながら、先ほど示した通り、話すことができる人に対しては、その方の言動を丸ごと信じてしまう欠点があります。一方、しゃべることができない人の行動に対しては、常に問題行動等トラベリングをして、ネガティブに評価してしまうという欠点があります。Bさん、捨てることを何年も続けているのに、職員の評価は「また捨てている、困った人だ」に留まっていた。思考停止状態の職員の脳みそには「なぜ、捨てているのか？」という疑問形は浮かびません。そこで、とにかく「よく観察す

ること」という宿題が職員には出されました。よく観察すると、どうも硬いもの、噛みにくいものの時に、残飯入れに捨てられる量が多いようでした。非常に簡単な支援ではありますが、職員は食事を刻むことにしました。すると、Bさんは、毎食美味しくそうに食事をし、栄養補助職員はすぐに必要なくなりました。たったこれだけの観察ですが、観察が支援方法を変えたのです。

Cさん、普段から良くしゃべる人ではありますが、食堂ではひときわ音量大きくしゃべり続けます。反復的な内容なので、職員にとっては、そのせいで食事時間は大幅に長くはなっているものの、大きな課題にはなっていませんでした。しかし、ここでも重要なのは観察でした。ある職員がメニューがカレーライス時にはしゃべる量、音量ともに増すことに気がついたのです。カレーを嫌いという風には感じなかった職員は、カレーとライスとを別盛りにするのを提案しました。この試みは大成功でした。その後、丼物全てが別盛りになり、同じようにしゃべる量と音量が観察の指標になり、嫌いな食材も明らかになってきました。気がついたら彼の食事は静寂の中で進行するようになっていました。

さて、Dさん、朝食に限って立ち上がって食べる時間があります。妙な行動とは言え、他の食事時間ではそのような行動が見られないので、職員には「座って下さい」といつも声をかけられています。さあ、観察です。するとパンを食べる時にだけ立ち上がることが発見されたのです。さらにその食べ方は、顎を上あげ一気に飲み込むような姿勢であることも報告されました。それは「鳥が水を飲むような格好」なのでした。さっそくパンは刻まれました。彼はその日から座ってパンを食べることができるようになりました。パンは呑み込み辛かったですね。

さて、観察力パワーいかがですか？

ラベリングの災禍、俵万智さんの短歌を紹介して筆をおきます。

何となく わかったような気になって 「登校拒否」と その子と呼べり